

# 自然と建築—そのかたちとレトリックについて

## Study on Nature and Architecture --- about the forms and the rhetorics

学生番号 76817  
氏名 赤坂 惟史(Akasaka, Yuishi)  
指導教員 大野 秀敏 教授

### 第1章 序

建築には、自然の見方を規定するという側面がある。例えば橋は、「橋上」という新たな視点とともに「自然を統一しつつそれに組み込まれる」という風景を生む。「自然風景の観測装置(場)」として、また「自然風景の構成要素(景)」として、建築は二つの異なるまなざしを提供するのである。本稿の目的は、この二重性が成立する状況、及びそこで生みだされる意味とそのプロセスを描写することにある。

そのために、まず自然との関わりの強いと思われるものをスケール横断的に収集した。それらを第二章で説明する指針をもとに分析し、第三章でまとめた。第四章ではそれに考察を加えるとともに、本論の意義を示した。

### 第2章 背景と方法

本稿は、普遍的な自然観ではなく、建築が個別的・具体的に規定する自然の見方へアプローチするものである。

収集した事例を観察することで、建築の「自然に対する八つの基本的態度」を見出した。内部における「容れる」「囲む」、境界における「纏う」「擦る」、近接における「入る」「近づく」、そして遠隔における「選ぶ」「指す」である。これらの「態度」を成立させる建築的な「かたち」に着目し分類する。このかたちのことを<レトリック>として呼称し表記することにする。なぜなら<レトリック>はそのかたちの特徴によって、基本文としての「態度」を固有のやり方で修辭するからである。

本稿は、この<レトリック>の分析を通して「自然と建築との関わり」—建築の二重性の成立する状況—における人間的・審美的側面である創造的な認識を描写するのである。

### 第3章 <レトリック>各論

まず「基本的態度」の発する意味を明らかにして

から、各<レトリック>がどのように修辭するかを見ていく。

#### 3-1. 内部「容れる」

「自然を手の内にいれる」ことであり「自然の制御」を意味する。自然に対するなんらかの加工と、それをおさめるための容器が求められる。具体的には、「地面との切断」を行う<植木鉢>と、「外気との切断」を行う<テラリウム>である。

##### <植木鉢>

<植木鉢>はそのカタログ性とポータブル性によって、人工的秩序の中に自由自在に自然を持ち込むことを可能にする。屋外に置く場合には、空間的アイデンティティ—個性や共同性—の表現となり、それを明確化する。屋内に置く場合には、その空間の質を庭のような外部空間に近づける。また建築内外の境界部分に置く場合には、その両者の効果が得られる。<植木鉢>は、「自然の制御」という基本的態度に、それによる「自然の道具化」という含みを持たせるのである。

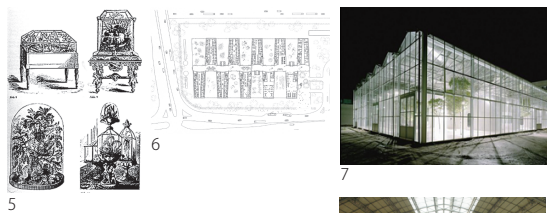


1.ボウサの集合住宅 2.リスボン旧市街 3.KAIT工房 4.パリ・ノールヴィルバント展示会場

##### <テラリウム>

原型は「自然の制御」すなわち植物の栽培と運搬という目的のための道具であり、「ガラスの覆いを植物にかぶせる」というかたちをしていた。つまり、ポータブル性のあるガラスのシェルターであった。運搬よりも栽培に重点をおけば、効率的制御のためにシェルターは拡大し、それによって人間のための内部空間が生じる。結果として<テラリウム>は、栽培とは無関係の用途に転用されたり、変形されて建築の構

成に組み込まれたりするようになった。〈テラリウム〉は、基本的態度に、このような「道具的空間としての自然」という意味を付与している。



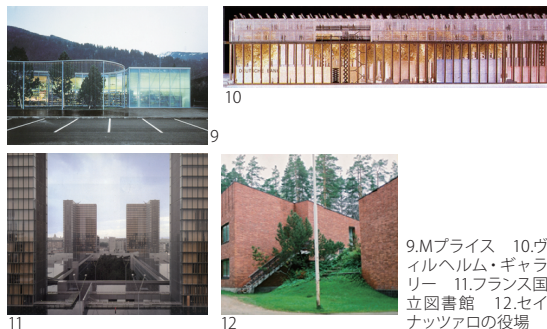
5.ウオードの箱 6.ルフトハンザ航空センター平面図 7.パジャマ・ガーデン 8.アトーチャ駅

### 3-2. 内部「囲む」

「自然を抱え込む」こと、すなわち「自然の所有」を意味する。「容れる」と同様、加工と容器が必要であるが、ヴォリュームの平面構成によって「周囲と切斷」し「囲む」のである。

#### 〈コートヤード〉

原型としての修道院の中庭は、口の字型のヴォリュームによって自然を周囲から隔離する。その一方で空と地面とはつながったままである。つまり部分的に外部指向性をもっているのである。これが前景化したものである〈コートヤード〉は、「口の字、コの字、L字、||字、○字などのヴォリュームで自然を囲む」かたちをしている。またそれに透過性をもたせることもある。いかにして隔離しつつ開くか、開きつつ隔離するか、ということをも主題とするのである。〈コートヤード〉は「自然の所有」に「意図的な不完全さ」を付与する。ここには、自然の独占に対する欲求と禁忌の念の葛藤が見えかくれする。



9.Mプライス 10.ヴァイルヘルム・ギャラリー 11.フランス国立図書館 12.セイナツツアロの役場

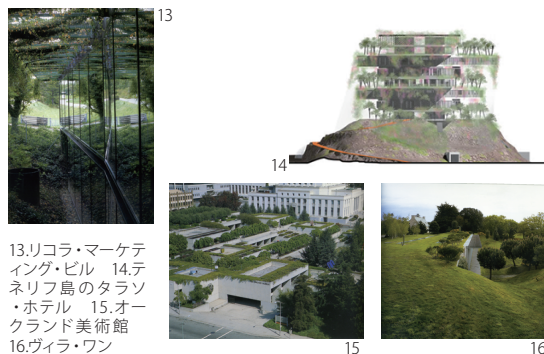
### 3-3. 境界「纏う」

「自然物をかぶる」こと、すなわち「自然への視覚的同化」を意味する。自然物の集合としての薄い層をかぶるかたちをとる。

#### 〈パーゴラ〉

〈パーゴラ〉は、部材やファサード、全体を覆う表

層的装置型と、地中に潜る埋没型にわけられる。さまざまな空間的な効果が期待されるが、それらからは建築の「外形の消失」への欲求が読み取れる。〈パーゴラ〉は、基本的態度に「建築の外観を誇示することへの疑問」という意味合いをもたせる。



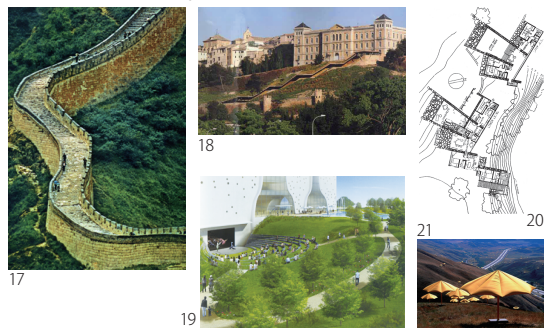
13.リコラ・マーケティング・ビル 14.テネリフ島のタラン・ホテル 15.オークランド美術館 16.ヴァイラ・ワン

### 3-2. 境界「擦る」

「自然への従属」を意味し、自然のトポグラフィを反映するかたちを要請する。

#### 〈長城〉

原型である《万里の長城》は、「一歩進んでは状況を確認し、それによって進む方向を決定する」という触覚的な手法によって成立しているように見える。〈長城〉は基本的態度の「触覚的な側面」を強調するのである。それには線的なかたちと面的なかたちがあり得るが、いずれにしろ体験者や制作者に「自然との触覚的な交わり」を要求し、また観察者にはそのさまを見せるのである。

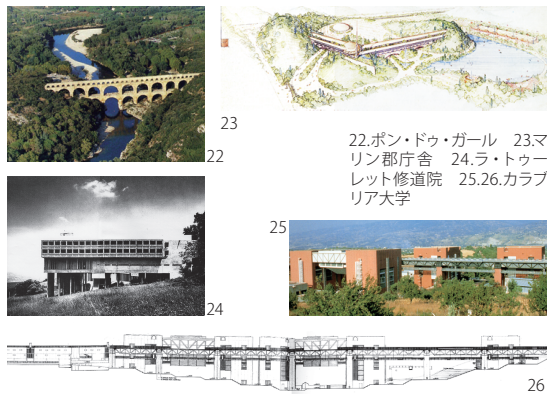


17.万里の長城 18.ラ・グラン・ハ・エスカレーター 19.台中メトロポリタンオペラハウス 20.カントリーハウス 21.アンブレラ・プロジェクト

#### 〈橋〉

〈橋〉の制作は、まず「自然と対比」する上部構造という基準線をひくことから始まる。それによって変化に富んだ自然を測定し、対応させることで「自然に従属」する下部構造をつくるのである。〈橋〉が示唆することは、「自然に従属」する場合であっても、自然が前提となる訳ではないということである。つまり、自然との対話は、挿入された人工的秩序をきっかけとし、またそれに依存しながら行われるのである。〈橋

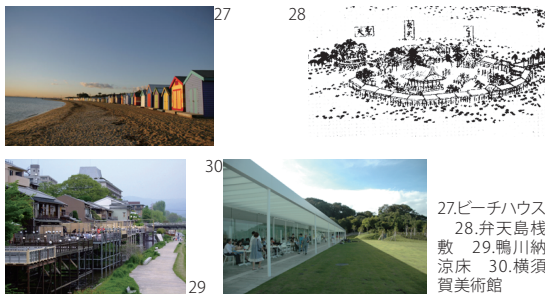
は、「自然への従属」という基本的態度に、「自然との対比」という前提を持ち込むのである。



22.ボン・ドゥ・ガール  
23.マリン郡庁舎  
24.ラ・トゥーレット修道院  
25.26.カラブリア大学

### ＜ビーチハウス＞

＜ビーチハウス＞は、限られた資源である眺望に最大多数の人がアクセスするためのかたちをしている。すなわち、「小さな単位」が「適度な距離を保つ場所」に「横並び」になるのである。栈橋のように一つのものが地形から突出するのではない。小さな単位が地形のもつ線に従属して横並びになるのである。それが可能となるスペースが先行条件としてある場合と、建築の一部がそれにあたる場合がある。＜ビーチハウス＞は、基本的態度に対して「自然への機会均等の精神」を付与する。



27.ビーチハウス  
28.弁天島栈敷  
29.鴨川納涼床  
30.横須賀美術館

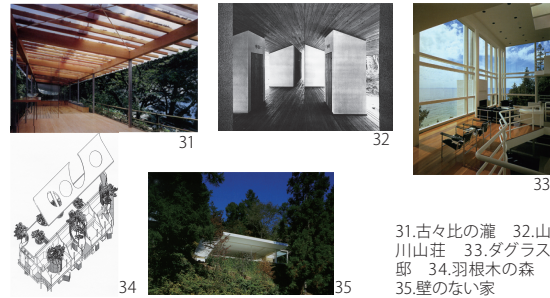
### 3-5. 近接「入る」

「自然に周りを囲まれる」、つまり「自然への没入」を意味する。

#### ＜東屋＞

原型は、四隅の柱によって支えられる吹きさらしの小屋である。プログラム上内部化しなければならない場合の＜東屋＞のかたちを、「囲む」という基本的態度を修辭する＜コートヤード＞のかたちを反転することで得た。それは「ロの字、コの字、L字、||字、○字」などのかたちで自然に囲まれる」ことであり、開口部の位置の平面的な工夫で達成される。また周囲のみならず、内側に抱き込むことで効果を増す場合もあ

る。これらのことは、充実した自然が与条件として欠如する場合でも＜東屋＞をつくることができることを示唆している。つまりその場合、基本的態度である「自然への没入」に、「その感覚は演出されるもの」であるという意味合いを持たせるのである。



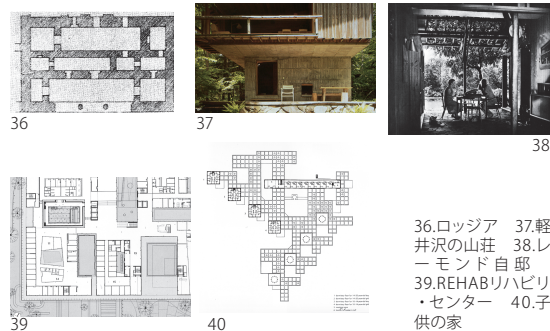
31.古々比の瀧  
32.山川山荘  
33.ダグラス邸  
34.羽根木の森  
35.壁のない家

### 3-6. 近接「近づく」

何らかの方法で「自然との距離を縮める」ことを意味する。

#### ＜ロτζア＞

建築の平面の輪郭に凹部つくことで、現象的に近づくかたちをとる。「建築に居ながらして」という点が重要である。ただ近づくのではなく、近づくための居場所を自然とともに作り上げるのである。一つの平面的凹部を原型として、断面的凹部、複数による凹凸、さらにそれ自身から成るようなものまで展開する。＜ロτζア＞は基本的態度に「自然との協調」という意味合いをもたせ、さらには、建築があつてこそ、自然の価値が高まるということを主張している。



36.ロτζア  
37.軽井沢の山荘  
38.レモンド自邸  
39.REHABリハビリセンター  
40.子供の家

### 3-7. 遠隔「選ぶ」

「自然のある要素を選択し、その他を排除する」ことである。

#### ＜風車＞

＜風車＞は、自然のある要素を、利益を得る目的で取捨選択し、変換するための装置である。そのため合理的形態によって、見る者はその自然の要素を類推的に知ることができる。つまり自然の特徴は相

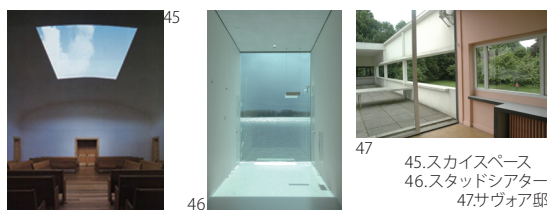
対的に強化されるのである。〈風車〉は、一方的な「選ぶ」という基本的態度に、「相補性」という意味を付与している。



41.横浜・風の塔 42.ライトニング・フィールド  
43.ジャイブール天文台 44.アラブ研究所

### 〈ディスプレイ〉

〈ディスプレイ〉は、自然風景との関連において、「選ぶ」という基本的態度が強く現れているものである。それは、開口部の工夫によって特定の風景を狙い撃ちするのである。その意味で借景と類似するが、借景のように近景—中景—遠景とレイヤーを重ねる発想はない。切り取った一枚のレイヤーを、開口部の断面を薄くするといったディテールによって、壁や天井に貼り付いたように見せるのである。この「奥行き感を消去」するのである。〈ディスプレイ〉は、風景を「選ぶ」ことにおいて、それが画像的に扱われるという側面を強調している。



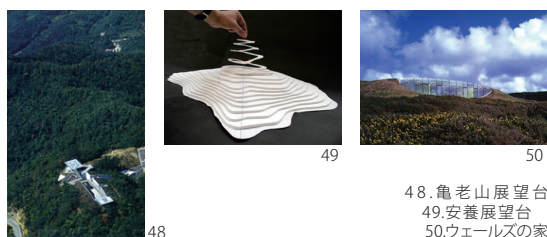
45.スカイスペース  
46.スタッドシアター  
47.サヴォア邸

### 3-8. 遠隔「指す」

「指す」ということは、「自然のある要素を指し示す」ことである。それは何らかの方法で自然の特徴を読み取り、可視化するかたちをしている。

#### 〈灯台〉

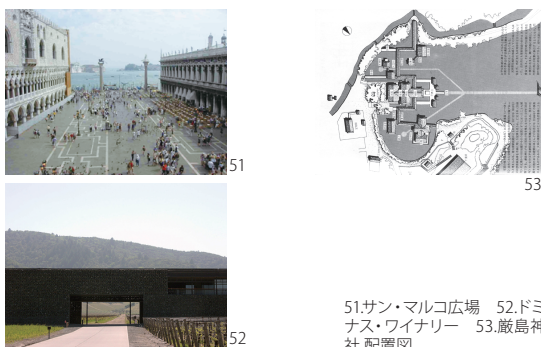
〈灯台〉は、地形の輪郭線を読み取って延伸するものである。それには、岬の突端の灯台のように現象的に延伸し「強調」する場合と、造成で失われた地形の輪郭線を物理的に延伸し「修復」する場合がある。いずれにしても、「自然を指し示す」という基本的態度における「自然を補う」側面を強調している。



48. 亀老山展望台  
49. 安養展望台  
50. ウェールズの家

### 〈ゲート〉

〈ゲート〉は入口としての象徴であり、また物理的に「こちら」と「あちら」を区切りつつなぐものである。いずれにしても見る者に「あちら側を意識させる」という性質をもつ。また、かたちとしては二つの鉛直成分をもち、それが挟む間に面をつくる。この二つの特徴から、〈ゲート〉は、その面の法線方向を視線の方向として指定するといえる。つまり、〈ゲート〉は、基本的態度における「方向性・軸の導入」という側面を強調している。



51. サン・マルコ広場 52. ドミナス・ワイナリー 53. 殿島神社配置図

## 第四章 結

### 4-1. まとめ

基本的態度をいかに〈レトリック〉が修飾するか、ということを見てきた。そのうちで最も興味深いのは〈橋〉と〈ロジャ〉であった。〈橋〉は、自然との対話には人工的秩序という基準線をまず引くことが必要であると主張している。また〈ロジャ〉は、自然だけではなく、自然と建築とが協調することではじめて居場所となる、という主張を含んでいた。これらの主張は、他の〈レトリック〉においても見え隠れするものではある。しかし、建築的に発展可能性の高いかたちで主張しているのはこの二つである。

### 4-2. 転用とかたち

人間の根源的な能力である転用において、重要なのは「かたち」である。事物のかたちの限界性が具体化のきっかけとなるのである。このメカニズムは新しく事物を作り上げる場合においても同じように働く。本稿がかたちに注目した意味はここにある。〈レトリック〉=かたちは開かれているのである。

本稿で提示した〈レトリック〉は主観によるものであるため、検証が必要である。検証は、実際の設計で用いられ、それによってできた空間を使用することでなされる。これを筆者の今後の課題とした。